

引率者

上田健二

平成 25 年 8 月 24 日朝、青少年とともに成田空港に降り立ったとき、ようやく安堵の気持ちが沸き上がってきました。

青少年をそれぞれの保護者の方々に無事お引渡しができること、平成 19 年以来、6 年ぶりとなるメダン市青少年派遣事業は無事終了したことをはじめて実感しました。

そして、青少年の逞しくなった表情、自信に満ちた口調を見たとき、この青少年事業が成功したと確信しました。

今回の事業を振り返りますと、事業の遂行にあたり決して順風満帆とはいきませんでした。航空券の手配が、日中関係の悪化等の政治情勢が影響して難航したことや、渡航直前の 7 月末に、メダン市の国際空港が変更され、新空港の詳細に関する情報の入手が困難を極めたこと、さらにメダン市内の刑務所から 200 人以上の囚人が脱走したという報道もあり、派遣の中止が検討される状況も起こりました。

そのような困難な状況に直面しながらも、メダン市委員会を中心とする国際交流協会の方々、メダン市姉妹都市協会、メダン市の方々のご尽力、そして何よりも青少年のみなさんと保護者の方々のご理解、ご協力もあり、本事業は進捗し遂行されるに至りました。

私にとっては、平成 22 年 4 月に現在の部署に配属されて初めての海外、インドネシア訪問となりました。

親善使節団として青少年代表団を率いるにあたり、私が心がけたことは、大きく 2 点ありました。

一つ目は、私自身を含め、青少年団としての派遣事業の目標を設定することでした。

青少年団として共通の目標を、自らが意見をだし合いながら、自分達で意見を集約させていき、設定しました。

また、オリエンテーションを通じて感じたことを踏まえて、一人一人の目標も設定してもらいました。これは目標をもつことで、全員が受身ではなく、主体的に取り組んでほしいという思いからでした。

二つ目は、派遣生の自主性を尊重し、私自身は裏方に徹するということでした。

この自主性については、自由な行動というよりも、自分で考えたことや、思ったことに対する回答を自分達の自由な感性で見つけてほしいということです。

この考えの背景として、今回の派遣生たちのインドネシアに対する興味の分野が、かなり明確だったことが挙げられます。例えば、イスラム寺院の建築様式・美術・経済・福祉などです。そのため、さらなる探究心を阻害したくないという私なりの配慮でもありました。派遣前のオリエンテーションでも、その考えを貫きました。

計7回実施したオリエンテーションは回数は多かったです、内容は充実していました。内容としても、リーダーを決めることや、現地での文化交流については、学生自らが決めていきました。また学生からの声も大切にしました。メダン市から友好の証としていただいたオランウータンをみたいと言えば実際に動物園を訪問しました。また、インドネシアの政治、経済について知りたいといえば資料を作成しました。

さて、青少年のみなさんにとって、インドネシアという国は、どのように映ったのでしょうか。予想以上に意外だったということが数多くあったのではと思います。

私が一番あげるとすれば、日本に負けないくらいの「おもてなし」の精神を感じたことです。メダン市、メダン姉妹都市協会、学生会（OSEM）のみなさん、在メダン日本総領事館、および訪問先の高等学校等で接した方々みなさんが私たちを心から温かく迎えてくださいました。

問題が生じたときでも、必ずしも言葉があるわけではないですが、笑顔、しぐさなどで、私たちを安心させるように対応していただきました。

なかには、高熱で体調を崩され、また大切な私用があるにもかかわらず、「私の天命だから」と団の随行を続けてくださった方がいました。まさに「武士道」の精神を異国の地で体現されている感があり心を打たれました。同時に、諸先輩方が築き上げてきた信頼関係の積み重ねがあったからこそ、そうした行為につながったのではと考えたときに、都市締結後四半世紀にわたる時の重みを感じた瞬間でもありました。

その夜ホテルで「働く意味」について考えさせられたことを覚えています。

また、現地の方々から、少しでもプログラムが充実したものになるようにと、特段の配慮もいただきました。例年になかった北スマトラ州知事表敬訪問、日本総領事館での日本語サークルとの交流なども含まれ、市川の青少年にメダン市を知ってほしいという現地の方々の強い熱意を感じました。一方で、多くの文化的違いがあったことも事実です。イスラム教に由来する日常マナーの違い、時間に対する考え方の違い等青少年にとっては戸惑うことが多々あったと思います。

しかし、教科書の世界ではなく、実体験としてその違いを知り、戸惑い、困り、悩み、解決を目指す方向を考えることができたことは、かけがえのない経験だと思います。

皮膚感覚として学んだことは、今後滅多に忘れることはないでしょう。

そして欧米や、ただ自然が豊富な国等ではなく、価値観の異なるインドネシアだからこそ培えた経験とも言えるのではないのでしょうか。

ぜひ今回の経験に自信を持ってください。これを糧にして将来、多方面で真の国際人として活躍していただくこと切に願っております。